

## The King and a Shoemaker

One day, a king who dressed like a beggar went to town by himself. There was a small shoe shop, where an old man was busily making a shoe.

The king entered the shop and said,

“Hello, old man, tell me your name.”

The old shoemaker, not knowing he was the king, said sharply,

“When you ask me, you should ask me more politely.”

And he kept on his business without a hitch.

“What is your name?” The king asked.

“I told you that you should ask me more politely when you speak to me.”

The old man said bluntly again and kept on working.

The king, thinking he was to blame, asked the old man politely,

“May I have your name?”

”My name is Magistel.”

At last the old man said his name.

The king asked him,

“Mr. Magistel, between you and me, don't you think the king of this country is foolish?”

“I don't think so.” The old man answered.

“Then don't you think he was a little foolish?”

“I don't think so.”

Magistel said, nailing the heel on a shoe.

“If you say the king is a little foolish, I'll give you this. Nobody is hearing you. So you are safe.”

Saying so, the king took a golden watch out of his pocket and put it on a knee of the old man.

“If I say the king of this country is foolish, do you really give me this?”

The old man, lowering his hand that had a hammer, saw the watch on his knee.

“Yes, in a small voice, if you say the words, I'll give you this.”

The king said, rubbing his hand together.

Just then, the old man abruptly grabbed at the watch and struck it against the floor.

“Get away, or I'll hit you to death. Idiot! No king in the world is more wonderful than one of this country.”

The old man raised the hammer in his hand.

The king rushed out of the shoe shop, when he bumped his head against a bar of the sunshade and had a big bump.

The king, however, felt happy in his mind like a flower.

“My people are excellent. My people are excellent.”

The king walked back to the castle, repeating so.(2018/03/01)



## 王さまと靴屋

ある日、王さまはこじきのようなようすをして、ひとりで町へやってゆきました。

町には小さな靴屋がいっけんあって、おじいさんがせっせと靴をつくっておりました。

王さまは靴屋の店にはいって、

「これこれ、じいや、そのほうはなんという名まえか。」

とたずねました。

靴屋のじいさんは、そのかたが王さまであるとは知りませんでしたので、

「ひとにものをきくなら、もっとていねいにいうものだよ。」

と、つっけんどんにいて、とんとんと仕事をしていました。

「これ、名まえはなんと申すぞ。」

とまた王さまはたずねました。

「ひとにくちをきくには、もっとていねいにいうものだというのに。」

とじいさんはまた、ぶっきらぼうにいて、仕事をしつづけました。

王さまは、なるほどじぶんがまちがっていた、と、思っ、て、こんどはやさしく、

「おまえの名まえを教えておくれ。」

とたのみました。

「わしの名まえは、マギステルだ。」

とじいさんは、やっと名まえを教えました。

そこで王さまは、

「マギステルのじいさん、内緒の話だが、おまえはこの国の王さまは馬鹿やろうだとおもわないか。」

とたずねました。

「おもわないよ。」

とマギステルじいさんはこたえました。

「それでは、こゆびのさきほどばかだとはおもわないか。」

と王さまはまたたずねました。

「おもわないよ。」

とマギステルじいさんはこたえて、靴のかかとをうちつけました。

「もしおまえが、王さまはこゆびのさきほどばかだといったら、わしはこれをやるよ。だれもほかにきいてやしないから、だいじょうぶだよ。」

と王さまは、金の時計をポケットから出して、じいさんのひざにのせました。

「この国の王さまがばかだといえばこれをくれるのかい。」

とじいさんは、金づちをもった手をわきにたれて、ひざの上の時計をみました。

「うん、小さい声で、ほんのひとくちいえばあげるよ。」

と王さまは手をもみあわせながらいました。

するとじいさんは、やにわにその時計をひつつかんで床のうえにたたきつけました。

「さっさと出てうせろ。ぐずぐずしているとぶちこころしてしまうぞ。不忠者めが。この国の王さまほどごりっぱなおかたが、世界中にまたとあるかッ。」

そして、もっていた金づちをふりあげました。

王さまは靴屋の店からとびだしました。とびだすとき、ひおいの棒にごつんと頭をぶつけて、大き



なこぶをつくりました。

けれど王さまは、こころを花のようにあかるくして、  
「わしの人民はよい人民だ。わしの人民はよい人民だ。」  
とくりかえしながら、宮殿のほうへかえってゆきました。